

スラヴ民衆文化における週と曜日

伊 東 一 郎

筆者は旧稿「何故『金曜日は糸巻きもせず』なのか」[伊東 1992]において、スラヴ民衆文化における週概念の構造、個々の曜日の吉凶の概念、労働のタブー、曜日の人格化について論じた。そこでは奇数曜日と偶数曜日の対立という東スラヴでは顕著な現象をセルビアの事例と対比し、その対立の現象が必ずしもセルビアには認められないことを指摘したが、西スラヴの事例については参照することができなかった。本稿はその欠を補い、スラヴ民衆文化全体における一週間という時間概念の構造的な理解に寄与することを目的としている。

1. スラヴ民衆文化における一週間 — 週は何曜日から始まるか？

旧稿でも触れたが、スラヴ諸語における曜日の名称は、ほぼ共通していて、共通の語源に遡ることが可能である(表2参照)。これらの曜日名は伝説的にはスラヴ人へのキリスト教の布教者で、教会スラヴ語の制定者である聖メトディオスが定めた、とされているが、スラヴ人にキリスト教が伝えられた9世紀以前にスラヴ人がどのような曜日の体系とその語彙を持っていたかは、スラヴ人がキリスト教を受容する以前には文字を持たなかったために不明である⁽¹⁾。マイクロシチを始めとして多くのスラヴ言語学者はキリスト教以前のスラヴ人はそもそも曜日の観念を持たなかった、としている[Flier 1995: 101]。

ただ教会スラヴ語の曜日の名称をギリシア語のそれと比較すると、そこには明らかな違いがあり、ギリシア語の曜日名をモデルとして教会スラヴ語の曜日名が定められたのではないことは明らかである。つまりギリシア正教で伝統的に用いられているギリシア語の曜日名では、日曜日を第1の日 *πρώτη* とし、順次月曜日を第2の日 *δευτέρα*、火曜日を第3の日 *τρίτη*、水曜日を第4の日 *τετάρτη*、木曜日を第5の日 *πέμπτη* としているのに対して⁽²⁾、教会スラヴ語では「日曜日」は「働かない日」を意味する *nedělja* で表わされ、第1の日を意味する曜日名でもなく、またギリシア語で「主日」を意味する「日曜日」*κυριακή* の名称の借用語でもない。従ってスラヴ語のネデーリャが、多くの語源学者が主張するようにキリスト教の「安息日」を意味する語として、スラヴ人へのキリスト教の導入時に作られたものかどうかは必ずしも自明のことではない。フライアーは通説に対してこの語彙はキリスト教導入以前からスラヴ人の共有していたものである、と反論している[Flier 1985]。

さらに「月曜日」はギリシア語のそのように「第2の日」ではなく、po-neděl'-nikъ「日曜の次の日」と呼ばれ、火曜日以降は後述のようにギリシア語の曜日名に用いられているものとは一つずつずれた数詞に基づく曜日が3つ続く。つまり火曜日が第2の日、木曜日が第4の日、金曜日が第5の日と呼ばれている。この月曜日を第1の日とする曜日の数え方はリトアニア語、ラトビア語などのバルト語、ハンガリー語にも知られている。ちなみにこれらの言語を母語とする諸民族において、いずれもキリスト教導入が西欧より5世紀以上も遅れていることは興味深い [ユングマン 1997: 36; Uspenskij 1982b: 70]。また土曜日はギリシア語とは異なり数詞に基づく名称ではなく、ヘブライ語の借用語 sčbota の名で呼ばれた。

この教会スラヴ語の曜日名は基本的に全スラヴ語に共通に受け継がれているが [表2参照]、そこで特徴的なことは、曜日名称に、日曜から数える曜日の系列と、月曜から数える曜日の系列があることである。

月曜日は前述のように「日曜の翌日」を意味する po-neděl'-nikъ で呼ばれた。この曜日名は従って週を日曜から数えていることになる。水曜日は「(週の) 中心」を意味する srěda で呼ばれたが、水曜日が週の中心に来るには週を日曜日から数えねばならない (スラヴ語の srěda の語源は古高地ドイツ語 mittawēcha の借用訳という説が有力だが、異論も提出されている)。

これに対してロシア語を例に取れば、順序数詞に由来する火曜 (vtor-nik 「2番目の曜日」)、木曜 (četver-g 「4番目の曜日」)、金曜 (pjat-nica 「5番目の曜日」) は、週を月曜から数えていることになる (表1参照)。このスラヴ語における週と曜日に関する語彙に関してはマトウシェフスキの綿密な研究があるので、それにゆずることにするが、要するにスラヴ語の曜日名の体系には、日曜日から数える方法と月曜日から数える方法が混在している、ということだけをここでは確認しておこう。このうち日曜日から週を数えるのは教会暦、月曜日から数えるのは民衆暦、とダーリは記している [Dal' 1881: 517] が、スラヴ民衆文化においては、曜日を、幸運な日—不幸な日、あるいは清浄な日—不浄な日のように土の価値評価を付けて分類する習慣があり、この

表1 ロシア語の曜日名における二つの系列

日曜日から数える曜日名	月曜日から数える曜日名
1 воскресенье [=не-дел-я] (働かない日=日曜)	
2 по-недель-ник (日曜の翌日=月曜)	1
3	2 вторник < второй (第2の日=火曜)
4 среда (中心=水曜)	3
5	4 четверг < четвертый (第4の日=木曜)
6	5 пятница < пятый (第5の日=金曜)
7 суббота (サバト=土曜)	6 суббота
	7 воскресенье (復活=日曜)

価値評価は週を何曜日から始めるか、という問題と密接に関わっているからである。

結論から言えばスラヴ民衆文化において、週は月曜日から始まるものと考えられており、これを前提として東スラヴにおいて月水金がよくない日とみなされていることを根拠に、スラヴ民衆文化において偶数—奇数の対立が、幸—不幸の対立に重なることを主張したのはイワノフとトポロフの『スラヴ言語モデル化記号体系』(1965)であった。このことは早くからポチェブニャーが示唆していたことだったが[Potebnja 1914:194-195 (= Potebnja 1989:476)]、本書で彼らはスラヴ人の週は月曜日から始まることを前提とし、奇数曜日が不幸な日、偶数曜日が幸運な日とみなされていた、と主張した。その根拠は主にロシアの資料であり、ダーリが「月曜と金曜は辛い日だ、火曜と土曜は楽な日だ」[Dal' 1882a:286]としていることなどに基づいている。ただし著者らは他のスラヴ地域では必ずしも偶数曜日がよく、奇数曜日が悪い、とみなされているとは限らないことを認めている[Ivanov, Toporov 1965:91]。本論の目的はまず第一にスラヴ民衆文化において曜日がどのような基準で分類され、評価されているかを具体的な事例に基づいて検証することにある。

2. スラヴ民衆文化における曜日の評価

文化の意味論的体系において、しばしば時間はよい時間と悪い時間とに分類される。ブルガリアの民俗学者ディミタル・マリノフは「人の時間の全体を民間信仰は良い年と悪い年、良い月と悪い月、良い日と悪い日、良い時と悪い時に分けている」と述べ[Marinov 1981]、ブルガリアにおける曜日の吉凶について記している。しかし曜日の吉凶についてはスラヴ諸民族の間でその評価は必ずしも一致しない。以下スラヴ諸民族における曜日一般の評価について具体的に見てゆこう。ただしここでは民間暦における特定の曜日(例えば聖大金曜日など)の評価については特に触れないことにする。

以下のデータは主に『スラヴ古代文化 [事典]』1～3巻、『スロヴァキア民衆文化百科事典』1～2巻、[Marinov 1981:259-260]、『セルビア神話学事典』(引用文献表参照)などによっている。

(1) 月曜日

ダーリの『ロシア民衆の諺』(1862)及び『ロシア語詳解辞典』(1863-66)によればロシアでは月曜日は最悪の曜日とされている。そこには「月曜日は不吉な[黒い]日だ。何事も始めてはいけな、旅に出てはいけな」Понеделник чёрный день, и ничему почину не делают, в дорогу не выезжают。[Dal' 1882a:286]とあり、「月曜日に旅に出てはいけな」という記述は18世紀後半のチュルコフの『迷信事典』(1782)の「旅」Дорогаの項目に既に見出される[Čulkov 1782:158]。これは明らかに月曜日に悪いことがあるとそれは一週間続く、という考え方、即ち月

表2 スラヴ諸語における「週」と曜日

	1. 共通スラヴ語	2. 教会スラヴ語
週	?	sedmica
日	*nedělja	nedělja
月	*poneděl'nikъ	poneděl'nikъ
火	*vъtorъnikъ	vъtorъnikъ
水	*srěda	srěda
木	*četvъrgъ	četvъrgъ
金	*pětъkъ	pětъkъ
土	*šestъkъ?	sobota

3. 東スラヴ語			
	3-1. ロシア語	3-2. ウクライナ語	3-3. ベラルーシ語
週	nedelja	tyžden'	tydzen'
日	voskresen'e	nedilja	njadzelja
月	ponedel'nik	ponedilok	panjadzelak
火	vtornik	vivtorok	aŭtorak
水	sreda	sereda	serada
木	četverg	četver	čacver
金	pjatnica	p'jatnycja	pjatnica
土	subbota	subota	subota

4. 西スラヴ語					
	4-1. チェコ語	4-2. スロヴァキア語	4-3. ポーランド語	4-4. 上ソルブ語	4-5. 下ソルブ語
週	týden	tyždeň	tydzień	tydžeń	tyžeń
日	neděle	nedel'a	niedziela	ńedzela	ńezela
月	pondělí	pondelok	poniedziałek	póndžela	pónžele
火	úterý (úterek)	utorok	wtorek	wutora	waltora
水	středa	streda	środa	srjeda	sfoda
木	čtvrtek	štvrtok	czwartek	štwórtk	stwórtk
金	pátek	piatok	piątek	pjatk	pětk
土	sobota	sobota	sobota	sobota	sobota

5. 南スラヴ語				
	5-1. ブルガリア語	5-2. マケドニア語	5-3. セルビア=クロアチア語	5-4. スロヴェニア語
週	sedmica nedelja	nedela sedmica	nedelja sedmica	teden
日	nedelja	nedela	nedelja	nedelja
月	ponedelnik	ponedelnik	ponedeljak	ponedeljek
火	vtornik	vtornik	utorak	torek
水	srjada	sreda	sreda	sreda
木	četvъrgъ	četvrtok	četvrtak	četrtok
金	pětъk	petok	petak	petek
土	sъbota	sabota	subota	sobota

曜日を一週間全体のメトニミイとする発想から来ている。それはダーリが採録している次のような諺がはっきり示している—「月曜日に起きたことは良かれ悪しかれ丸々一週間続く」С понедельника на всю неделю (идёт счастье или несчастье). [Dal' 1862: 1031]。同じような観念はウクライナにも次のような諺として知られている—「月曜日には仕事を始めるな、旅に出掛けるな」У понеділок роботи не починай і в дорогу не вирушай. [Pazjak 1989: 89]。

ちなみにゴーゴリがウクライナを舞台とした短篇『ソローチンツィの定期市』(1832)の十章で、おのれの不運を嘆く主人公ツイブーリャに「どうも月曜日に出てきたのがよくなかったんだ」と言わせているのはこの俗信による。

この「月曜日に起きたことは良かれ悪しかれ一週間続く」という観念はやはりダーリが採録している次のような諺に結びつく—「月曜日に金を渡すと、一週間の散財」В понедельник деньги выдавать — всю неделю расходы. [Dal' 1862: 1031]。

スロヴァキアではやはり月曜日に事を始めるのは良くない、と考えられ、パン焼きは禁じられたが、逆に耕作の開始にはよい、とされた。またスロヴァキアでは「青い月曜日」という慣習が職人の間にあり、この日に仕事を休んだという [Feglová 1995]。

また月曜日が妖怪の出現と結びついている場合があり、ロシアでは三位一体祭の週の後の月水金曜日にはルサルカがこの日に働いている人間を襲う、とも信じられた [Ivanov, Toporov 1965: 90]。またスロヴァキアでは糸紡ぎなどの一定の女性の労働のタブーを破った者を襲う女性の「月曜妖怪」pondelča ポンデルチャが現われる、と信じられていた [Cibulová 1995]。

このような俗信の基礎には、月曜日が週初めの曜日である、という民衆的観念があり、「スラヴ人において奇数曜日は不幸な日」という仮説の根拠となっているが、同じく月曜日を週の最初の日である、という認識を見せながら、南スラヴでは月曜日に逆の評価を与えている。例えばセルビアでは月曜日は週初めの日なので、何かを始めるには一番良い日であり、農村ではしばしば月曜日に種まきを始める。若者の娘への結婚申し込みは月曜日がよい、とされた。また同じくセルビアではこの曜日に生れた子供は幸せになる、と信じられた。ブルガリアでも月曜日は良い日で、これはロシアやウクライナとは逆である。ところがセルビアではこの日に物を貸すと返らない、という俗信があり、人々はこの日に金の貸付けや、掛売りをしたがらなかった。この矛盾は、月曜日を奇数曜日というより、週初めの曜日とみなす認識と結びついている(次節参照)。このように概して東西スラヴでは月曜日は否定的評価を受け、南スラヴでは否定的評価を受けている。

(2) 火曜日

ダーリによればロシアにおいては火曜日は「楽な日」である。既に述べたように彼の採録した諺には「月曜と金曜は辛い日だ、火曜と土曜は楽な日だ」というものがあり [Dal' 1882a: 286]、ウクライナにも「火曜日は幸福な日だ」Вівторок — щасливий деньということわざがある

[Pazjak 1989: 89]。スロヴァキアでは火曜日はロシアと同様よい日と考えられていたが、呪術的行為の行われる曜日であった。

セルビアではこれとは逆に火曜日は何かを始めるには悪い日だ、とされている。具体的にはセルビアではこの日に生れた子供は不幸になると考えられ、洗礼や婚礼は火曜日を避けた、という。またスロヴァキアと同様呪術的行為は多く火曜日に行われた。

ブルガリアでも火曜日はセルビアと同様良くない日、とされた。マリノフは次のような民謡を引いている—

Родила те майка ти

У чърн вторник.

「おまえをおまえの母さんは生んだ

黒い火曜日に」

ここで「黒い火曜日」と呼ばれているのは大斎期第1週の火曜日のことで、この日に生れた者は一生不幸だ、とみなされる [Маринов 1981: 259]。ブルガリアでも、よい結果にならないので火曜日には事を始めてはいけない、危険に見舞われるから旅に出てはいけない、などロシアの月曜日と同じタブーが見出される。また種まきをしても芽が出ない、木を植えても実がならない、と信じられた。羊や牛の仔がこの日に生れると、群れ全体に不幸をもたらすとして屠られた。

このように概して東西スラヴでは火曜日は肯定的評価を受け、南スラヴでは否定的評価を受けている [Tolstaja 1995b]。

(3) 水曜日

水曜日はロシアでは悪い日である。ロシアには「月曜と水曜と金曜には事を始めるな」В понедельник, среду и пятно дела не начинай. という諺がある [Dal' 1882a: 286]。ちなみに16世紀ロシアの『百章』(41章、21問)によれば、その頃既に水曜日に糸紡ぎ、洗濯、ベチカを焚くことなどをタブーとする習慣があり [Stoglav 1863: 138; 中村 1993: 62]、19世紀でも機織や亜麻布の漂白などはタブーとされた。スロヴァキアでもこの日は良くない日である。中部スロヴァキアでは「災いなる水曜日、悪い始まりの金曜日」»Streda-beda, piatok-zlý začiatok«と言われており、この日に発病すると死に至る、と考えられた。長期に渡る旅の出発、家畜の最初の追い出しはしてはならない、と考えられ、この日に魔法の噂をすると聞きつけられる、と言われた。

セルビアでは水曜日には何かを始めるにはよい日であり、この日に子供が歩き始めると丈夫になると信じられた。しかしセルビアではこの日パン焼きや羊毛刈りをしてはいけない、子供に水浴させてはいけない、髪をとかしてはならない、というような女性の労働に対するタブーがあった。ちなみに水曜日は日曜日から週を数える数え方だと週の「真ん中」になる。もしウスペンスキーの言うようにある時間的サイクルを二分する境界的時間(冬至と夏至、真夜中と真昼など)を「悪

い時」とみなすスラヴ人の時間観念 [伊東 1997] が週にも当てはまるのなら、水曜日を「悪い日」とみなすロシア、スロヴァキアでは週を日曜から数えていることになるが、事實はそれと矛盾する。

(4) 木曜日

木曜日はロシアでは不幸な日ではないが、特に良い日でもない。しかし月曜日から始まる週において木曜日が週を中心に当たる、という観念ははっきりとあり、ダーリの辞典には「木曜日は折り返し」четверг — перевал [Dal' 1882a: 286] という表現が見いだされる。このためか、木曜日はスラヴ民衆文化において重要な役割を与えられていることが多い。例えば復活祭後第7週の木曜は東スラヴではセミックと呼ばれる重要な春の祭日である。またゼレーニン¹は東スラヴ人は古くは聖大木曜日を一年の始まりとみなしていた、と主張しているし、同じゼレーニンによれば東スラヴではルサルカの出現する曜日を三位一体祭直後の木曜とする事例が最も多い [Zelenin 1916: 140, 173, 177, 195]。

スロヴァキアとセルビアでは木曜日は一週間で最も良い日である、と考えられた。このことは、木曜日が元来スラヴ神話の至高神である雷神ペルーンの日であったという仮説と結び付けて説明される場合があるが、それは現在は死語となった西スラヴ系のポラブ語で木曜日を「ペルーンの日」Peräunedån と呼んでいた事を唯一の根拠としている。しかしこれは隣接して居住していたゲルマン人が木曜を雷神トールの日 (cf. 英 Thursday) と呼んでいたのを借用した可能性があるし、ペルーン崇拜が最も顕著に認められる中世ロシアでも木曜日がペルーンの日とされていた証拠はなく、セルビア、スロヴァキアでも明確なペルーン崇拜の証拠は無い。

セルビアでは婚約式は木曜日前夜と日曜日前夜に行うのが最も良い、と考えられたが、ブルガリアでは木曜は悪い日とされている。召使いをこの日に雇うと居つかない、家畜をこの日に買うと逃げ出す、この日に雌鶏が卵を抱いてもかえらない、とされた。またこの日に結婚式をすると夫婦は別れることになる、種を撒いても実らない、とされた。さらにこの日に羊の囲いを作ると羊は逃げ出す、この日に生まれた者は一生さすらうことになる、この日に家を建てると家族は家に居着かない、とされた。

スロヴァキアでは木曜は職人仕事、家畜の最初の追い出しによい、とされ、セルビアと同様、婚約は木曜日がよい、とみなされた。また木曜に汲んだ水で洗顔すると、顔がいつもみずみずしく保たれる、と考えられた。

しかしスロヴァキアでは逆に一定の仕事に対してタブーがあり、木の伐採は禁じられ、家のペンキ塗りをすると虫がわく、と考えられた。また羊毛を紡ぐと羊が狼に襲われる、とみなされた。これらのタブーとされた仕事を行うと、「木曜のヴィーラ」あるいは木曜妖怪シクルテク škrték が罰する、と考えられた。このスロヴァキアにおける木曜の労働のタブーは東・南スラヴの金曜

日の労働のタブーを思わせるものがあり、東・南スラヴにある聖パラスケーヴァ信仰（次項参照）が西スラヴにはないことと関係があるかもしれない。

(5) 金曜日

金曜日はスラヴ諸民族全般においてよくない日である。これは教会暦において金曜日がキリストの受難日であることと関係しているが、後述するように東・南スラヴでは特に聖女パラスケーヴァ信仰と重なり合い複雑な様相を見せている。

ロシアでは前述のように「月水金には事を始めるな」と言われており、スロヴァキアでも事を起こしてはならない日とされているが、この日にはさらにスラヴ諸民族において様々な労働のタブーが見出される。

ダーリの諺には「金曜日には男は耕さないし、女は紡がない」というものがある。これは聖パラスケーヴァの名が「金曜日」を意味するため、ロシアでは毎週金曜日が聖パラスケーヴァの日となり、彼女が女性の家内労働の守護者とみなされたために、毎金曜日に糸紡ぎ、機織りなどの女性の家内労働がタブーとされたためである。男性の労働のタブーはおそらく後に付け加わったものであろう。ロシアでは聖パラスケーヴァ崇拜が特に顕著だが、これは東スラヴにおいてのみ、元来スラヴ諸語では男性名詞であった「金曜日」**petъkъ* が女性名詞の *piatnica* になってしまったことと関係があろう。セルビアでは金曜日の曜日名は *petak* で男性名詞、聖女の名は *Petka* であらわされ区別されるが、羊毛狩りや羊毛加工、糸紡ぎはやはりタブーである。

スロヴァキアとセルビアではこの日にはパン焼きがタブーとされた。スロヴァキアではこの日に耕作を開始してはならない、とされた。セルビアではこの日に洗濯してはならない、とされ、スロヴァキアではこの日に洗濯した着物を着たり、この日に石鹸で顔を洗うとできものができる、と言われた。またスロヴァキアではこの日に髪を梳かしてはならない、とされた。しかしスロヴァキアではこの日は収穫によい日とされた。これはネズミがこの日齋戒を守るので収穫物を食べない、とみなされたからかもしれない（次節参照）。

セルビアでは金曜日に埋葬された者は吸血鬼となる、と考えられ、また逆にこの日には吸血鬼は墓から出ない、と考えられた。これに対してブルガリアではセルビアとは異なり、金曜日は良い日、とされている。

(6) 土曜日

土曜日はロシアとスロヴァキアではよい日だが、セルビアでは悪い日である。しかし同じ南スラヴでもブルガリアでは良い日とされた。マリノフは次のような民謡の一節を引いている――

Родила ме мама

「母さんは私を生んだ

На добър ден бела събота.

良い日である明るい土曜日に」 [Marinov 1981: 259]

ロシアとセルビアでは土曜は共に死者供養の日であり、セルビアではこの日に生まれた者は不幸になるが、その代わり魔女を見分ける能力を授かる、と考えられた。スロヴァキアではこの日の糸紡ぎと耕作はタブーとされたが、東・南スラヴでは糸紡ぎのタブーは普通聖パラスケーヴァ信仰と結びつき、金曜日に見出される。

(7) 日曜日

日曜日はキリスト復活の曜日でもあり、復活祭との強い連想を持っていて、全スラヴ諸民族で良い日である。スロヴァキアとセルビアでは婚約によい日であり、スロヴァキア、ポーランド、ソルブでは日曜日に生れた子は幸せになる、と、またスロヴァキアでは、この日の売買はうまくゆく、と考えられた。またポーランドでは日曜日に生まれた者 *niedzialak* は死者を見ることができ、死者と交流できる、と考えられたが、同じポーランドのホルム地方では、*niedziela* の語源「何もしない日」からの連想で、日曜に生れると怠け者になる、と考えられた [Tolstaja 1995a]。

3. スラヴ民衆文化における曜日の分類

さて以上スラヴ諸民族における曜日の評価について見てきたが、その複雑な評価はどのような基準によってなされているのだろうか。ここであり得るいくつかの基準について検討を加えてみたい。

(1) 偶数曜日か奇数曜日か

月曜日から開始されるスラヴ人の一週間の構造を最初に偶数曜日・奇数曜日の対立でとらえたのはイワノフとトポロフである。彼らは『スラヴ言語モデル化記号体系』においてスラヴ民衆文化の意味論的体系を、そこで示差的機能を持つ上下、生死、左右などの意味論的二項対立の束としてとらえ、その中に奇数一偶数という二項対立を有意味な対立として組み入れた。彼らは東スラヴにおいて月・水・金が「不幸な日」として捉えられていることに注目し、奇数一偶数の対立を不幸一幸の二項対立に重ね合わせたのであった。彼らの主張によれば、スラヴ人においては奇数曜日が不幸な日で偶数曜日が幸運な日である。この主張は西スラヴではスロヴァキアの事例においてホルヴァートヴァーによって受け入れられており [Horváthová 1995]、東ポーランドのヘウム地方にも見出される。しかし既に見てきたように、南スラヴの事例はそれと矛盾し、事態はそれほど単純ではない。

B. ウスペンスキーは同じ問題を取り上げ [Uspenskij 1982b]、基本的に月・水・金が不幸な日とみなされていることを認めながらも、多くのそれと相反する事例があることを指摘し、特に

水曜日と木曜日の評価に矛盾が集中していること、即ちあるスラヴ圏では水曜日を良くない日とし、別の地域では木曜日が良くない日とされることに注意を向けた。この原因をウスペンスキーは週を日曜日から数える教会暦と月曜日から数える民間暦の並存に求めた。この二つの数え方によって週の「真ん中」の日が変ってくるからで、一年や一日を二分する境界的時間、つまり冬至や夏至、真夜中や真昼が、スラヴの民間では「危険」な時間とみなされていることを考えると、水木の評価がスラヴ圏内部で相互矛盾を見せる（前節参照）のは、この二つの数え方の並存がその原因という訳である。

M. フライアーはウスペンスキーに依拠して、「日曜日」の名称と週の構造について論じている [Flier 1984]。これに対して S. トルスタヤは、教会暦はいつも週を日曜から数えるわけではなく、復活祭を基準として、日曜日から数える時期（復活祭から三位一体祭まで）と、月曜日から数える時期（三位一体祭から復活祭まで）に分けられる事を指摘している [Tolstaja 1984]。また彼女はウスペンスキーに対して良い日と悪い日を分類する基準には、偶数—奇数の対立の他に更に幾つかの基準があることを指摘し、順序数詞による数え方は日曜を除いた平日にのみ適用されている、と考えるなら、二つの数え方の矛盾は解消される、としている。偶数奇数の対立が有意性を持つのはスロヴァキアと東スラヴの事例が示すように東西スラヴであり、南スラヴには当てはまらない。トルスタヤも同様の指摘を行っており、西スラヴからもこれに当てはまらないポーランドの事例を示している。

(2) 最初の日か最後の日か

スラヴ諸民族の民衆文化において週が月曜日から始まる、という観念は共通に認められるところで、このため月曜日は単に奇数曜日であるだけでなく、「始まりの日」である。このことは月曜日にことを始めてはいけない、という俗信がある一方、逆に月曜日にこそことを始めるべきだ、という俗信があるゆえんであろう。南スラヴでは月曜は良い日であるが、これを悪い日とする東スラヴにおいてもインゲン豆、カボチャ、キュウリなどの野菜はこの日に植えた。同様に、月曜を悪い日とするスロヴァキアでもこの日は耕作の開始にはよい、とみなされた。ちなみに週の最後とみなされたのは汎スラヴ的に土曜日であり、日曜日ではない。このことは最初の日である月曜日と同様、土曜日に種まきを始めてはいけない（セルビア）、旅に出てはいけない（カルパチア・ウクライナ）という俗信があったことからもうかがえる。これは明らかに土曜日が週最後の日とみなされたことによるからである。

(3) 齋戒日か非齋戒日か

キリスト教暦において曜日は齋戒日か非齋戒日かに分かれるが、曜日について言えば水金が齋戒日である。これはロシアで「不幸な日」とされる奇数曜日に重なる。しかしベラルーシのポーレ-

シエなどでは斎戒日にはネズミや害虫が「斎戒」するので、逆に野菜を植えたりするにはよい日とされた [Tolstaja 1999b: 98]。ロシアにはこの外にやはり奇数曜日にあたる月曜日に斎戒をする場合があり、「水曜日と金曜日のほかにさらに月曜日に斎戒をする」という意味の *понедельничать* という動詞がある [Dal' 1882a: 286]。ウクライナでも聖ペテロを記念して毎月曜日に斎戒する習慣があった [Uspenskij 1982a: 127]。

(4) 働いてよい日か悪い日か

民衆の俗信に従えば、「悪い日」には特定の労働がタブーになることが多いが、斎戒日における食事の制限は労働のタブーと結びつく。水金が「悪い日」であるとするロシアの観念は、おそらくこの斎戒日の観念とも結びついている。

斎戒日ではないが労働がタブーとなるのが日曜日である。「良い日」とされる日曜日に労働がタブーとされるのは、もともとキリストの復活を祝う安息日としての日曜日のキリスト教的観念に由来する。

(5) 女性曜日か男性曜日か

スラヴ語における曜日の名称は基本的に文法的には男性名詞か女性名詞のいずれかである。本来のスラヴ語では日曜日、水曜日、金曜日、土曜日が女性曜日で残りは男性名詞である (表2参照)。唯一の例外はロシア語で日曜日を表わす *voskresen'e* で、これはスラヴ語では例外的に中性名詞だが、これは「復活」を意味する抽象名詞が16世紀末に転用されたものである [Flier 1984]。トルスタヤによれば北ロシアのザオネジエでは中性名詞の *voskresen'e* は男性曜日に分類されるという [Tolstaja 1999b]。

この曜日の性別と結びついた俗信はスラヴ諸民族にしばしば見出される。

例えばセルビアのホモリエあるいはブリゴリエ地方では、妊娠を知った日が女性曜日か男性曜日にによって生れる子供の性別を占う [Schneeweis 1961: 40]。ハンガリーのスロヴァキア人も同様である。またスロヴァキアでは家畜の種付けをする際に、雌が欲しければ女性曜日に行く、などの習慣がある。ポーレーシエでは女性名詞 *kapusta* で呼ばれるキャベツは女性曜日に植えた。

イワノフ・トポロフは男性曜日と女性曜日の対立をプラス・マイナスの対立として、男性曜日を良い日、女性曜日を悪い日としているが、これは東スラヴにはほぼあてはまるものの西スラヴにおいては明確でなく、南スラヴにはあてはまらない。

4. 曜日の人格化

スラヴ民衆文化における曜日に関する俗信には、それに伴って曜日が人格化されるという現象がある。これは東スラヴの聖パラスケーヴァ=ピャートニツァに著しいが、他の曜日にも同様の

現象が見られる。既に16世紀に『百章』の第四十一章、第二十一問は、聖ピャートニツァ、聖アナスタースイヤがそれぞれ金曜日と日曜日の人格化された存在として崇拝されていたことを暗示している [Stoglav 1863: 138; 中村 1993: 62]。また人格化された曜日は労働のタブーと結びつくことが多い。

(1) 月曜日

月曜日を人格化した存在は南スラヴには見られないが、既に述べたようにスロヴァキアには「月曜妖怪」を意味する女性妖怪ポンデルチャ *pondelča* が登場する。ブレズノ地方の伝承では、ポンデルチャはこの日に紡ぎ仕事をしている女性たちの前に煙突を通してあらわれ、次のように叫んで彼女たちを襲う。「私は小娘のポンデルチャ、糸を紡ぎはしないよ」 *Ja som dievča — pondeča a nepradiem kúdelča* [Cibulová 1995]。この場合曜日名 *pondelok* と妖怪名は一致せず、文法的性別も曜日は男性名詞だが、妖怪名は女性名詞という不一致が見られる。

また既に述べたように、ウクライナでは毎週月曜日に齋戒する習慣があったが、この月曜日を聖ポヌィディーロクと呼んで人格化していた [Uspenskij 1982a: 127]。

(2) 水曜日

水曜日は東南スラヴで曜日名と同じ名のスレダーという女性に人格化される場合がある。これは具体的な実在の聖女のイメージとは結びつかないが、セルビアではスレダーのために前述のようにパン焼きや羊毛刈りなどの女性労働がタブーとされた。ロシアではスレダーは機織と亜麻布の漂白の手伝いをする、と考えられ、この日に女性は働いてはならない、というタブーがあった。フジャコフの『大ロシアの民話』(1860-62)にはスレダーについての伝承が収録されている [Xudjakov 2001: 322-323] (= [渡辺 1981: 145])。セルジュプトウスキの収集したベラルーシ民話には「セラダーとピャートニツァが農夫にどちらをより崇めているかを尋ねる」というモチーフが見出されるという [Barah 1978: 142]。

(3) 木曜日

木曜日は東・南スラヴにおいては人格化されないが、スロヴァキアではこの日に木曜のヴィーラ *víla* と呼ばれる女性の妖怪、あるいはシクルテク *škrtek* と呼ばれる男性の妖怪が登場し、特にこの日に糸紡ぎをしている者を襲う。

(4) 金曜日

金曜日は東南スラヴでは聖女パラスケーヴァ信仰と密接に結びついている。というのもこの聖女の名がギリシア語で「(ユダヤ人の)安息の準備日」、即ち金曜日を表わす女性名詞 *παρασκευή*

に由来しているからである。東スラヴの民間ではこのため彼女の名は「金曜日」そのものを意味するピャートニツァの名で呼ばれたが、注意すべきことはスラヴ語では金曜日は元来男性名詞 *petъkъ によって表わされていた、ということである。東スラヴではこれが pjatnica へと女性名詞化し、聖女パラスケーヴァの名であるピャートニツァと語彙的にも一致した。従って東スラヴの民間では金曜日は聖女パラスケーヴァのイメージと融合し、時間観念が人格化されて把握されるに至った。これに対して南スラヴにおいて曜日名は petak、petъk と男性名詞、聖女名はペートカ Petka と女性名詞で表現され、区別されている。ただしブルガリアでは地域によって金曜日を男性として人格化した聖ペトコ Св. Петко も知られている。これに対して西スラヴでは金曜日は人格化されないようである。東スラヴではピャートニツァはこの日に糸紡ぎをした者を罰する [Afanas'ev 1859: 47]。

ロシアおよびセルビアでは「12の金曜日の物語」が中世以来アポクリファとして知られ、ロシアではさらに民間の巡礼霊歌 (духовные стихи) に歌われている。そこでは教会暦における重要な祝日の直前の12の金曜日が個別的に人格化されている [Bessonov 1864: 120-157; Veselovskij 1876; Tolstaja 2005]。

アフナーシエフによれば、ウクライナでは聖パラスケーヴァは、体中に縫針と紡錘を突き刺した姿で歩き回る、と考えられたが、これはこの日にタブーを破って行われた女性の家内労働によって傷ついた姿とみなされた [Afanas'ev 1995a: 119]。また18世紀初頭の「宗教法規」によれば、ウクライナでは聖パラスケーヴァの日にピャートニツァと呼ばれ、頭に何もかぶらぬ一人の女性を連れ歩く習俗があった。

ところでパラスケーヴァの名で呼ばれる聖女はスラヴ地域では実は複数あり、ロシアでは旧暦10月28日を祝日とする、ローマ異教迫害時代(3世紀末～4世紀初頭)のパラスケーヴァが有名である。

史実によれば、このパラスケーヴァは小アジアのイコニアの裕福な家庭に生れたが、若くしてキリスト教に帰依した。「金曜日」の名は洗礼に際してキリストの受難日の曜日名を自らの洗礼名として選んだものという。その後ディオクレティアヌス帝の迫害にあい、改宗を迫られたが、それを拒んだために斬首されたという。

これに対して南スラヴで信仰を集めているのは11世紀のタルノヴォのパラスケーヴァで、こちらの祝日は10月14日である。しかしこの両者はしばしば混同された。

(5) 土曜日

土曜日がスラヴ人によって人格化されて信仰されていたかどうかは、はっきりしない。土曜日は曜日名の性別でいえば女性曜日にあたり、人格化されやすいカテゴリーといえるが、スラヴ語の sobota は、ヘブライ語の借用語であり、共通スラヴ語では「第6の日」を意味する *šestъkъ

であった可能性がある。しかしマクシモフは「三人の聖女、スレダーとピャートニツァとスッポータが主の受難を見てそれを世に告げ知らせた」というロシアの伝承を伝えている [Maksimov 1996: 265]。また、クロアチアでは土曜は日曜の姉妹とされ、ポーシェでは金曜、土曜、日曜は水曜の娘たちとされる。

(6) 日曜日

日曜日（ネデーリャ）が人格化された存在として崇拜されていたことは、13世紀以来写本で知られる中世ロシアの異教排撃の文書「ネデーリャと呼ばれる存在と曜日についての講話」«Слово о твари и о дни, рекомем неделе» などからも明らかである [Gal'kovskij 1913: 76-83, 1916: 98-101; Aničkov 1914: 97-100; Fedotov 1960: 358; Lixačeva 1969]。それによれば当時の民衆が「日曜日」という名の存在を偶像に作り祀っていたことが知られるが、このことは逆に nedělja という語彙で表されていたものは元来「働かざる日」ではなく「働かざる者」を意味する異教的存在だったのではないか、という推測を起こさせる。その場合語末の接尾辞-яは動作主名詞形成辞と解釈されよう。

この人格化された日曜日崇拜の残滓と思われるのが、南スラヴや、ネデーリャがロシア語と異なり「日曜日」を意味するウクライナとベラルーシにおける聖ネデーリャ崇拜である [Uspenskij 1982a: 137; Afanas'ev 1995a: 123-124]。また西スラヴのスロヴァキアでも聖ネヂェリカ Sv. Nediel'ka の登場する散文フォークロアが19世紀まで知られていたという [Horváthová 1995]。19世紀のウクライナでは日曜日に糸紡ぎをすることは、聖ネデーリャの頭髪を紡ぐことになる、と考えられ [Afanas'ev 1995c: 68]、セルビアでもこの日の糸紡ぎはタブーとされた。またセルビアでは聖ネデーリャは、日曜日にしばしば仕事をする職人たちの釘、錐、鋏などで体を苛まれると考えられ、それゆえ大殉教者である、とみなされた。ちなみにセルビアではペートカとネデーリャは母娘と、ブルガリアのタルノヴォ地方では聖デメトリオスのそれぞれ父方と母方の叔母であると考えられた [Marinov 1981: 366]。

次のブルガリア民謡では聖ペートカと聖ネデーリャは姉妹とされている。

Заспала света Неделя
 На света Петка скутови.
 Света я Петка будеше:
 «Стани ми, света Неделё!
 «Сега се соно не спиет,
 «Рано ми рано стануват:
 «До две празници кажуват,

聖ネデーリャは寝入った、
 聖ペートカの膝の上で。
 聖ペートカは彼女を起こした—
 「起きなさい、聖ネデーリャ、
 今は寝ている時ではありません、
 朝早く起きる日です。
 人が言うには二つの祭りが

«Свети църкви отворат,	聖なる教会を開くのです。
«Ангел от небо слезуват,	天使が空から降りてきて
«Ристосу лице омиват,	キリストの顔を洗うのです、
«Закопи по земля кажуват,	地上に律法を述べ伝えるのです、
«Да веруваят Рисяни.»	キリスト教徒たちが信仰するように」
Кога Неделя се рассони,	ネデーリャが目を覚ました時
Дробни ми сълзи порони	大粒の涙を流した、
По свои свети образи;	その尊いお顔に。
Света Неделя прикажвит:	聖ネデーリャは言った—
—Сестро ми, светая Петко!	「わが姉妹 聖ペートカよ!
—Малко ме дремка фатила,	私は少しうとうとしてしまい
—Да чудим сонок сонвала:	不思議な夢を見ました
—Стредь море дърво израсло,	海の真ん中に一本の木が伸びました、
—Израсло дърво високо,	高い木が伸びたのです。
—Върх дърво небо крепеше,	その頂に天が安まり
—Да под дърво-то два листа,	その木の下に二枚の紙が、
—Два листа били широки,	大きな二枚の紙があった、
—Сва-та ми земля покриват.—	大地の全てを覆うほど大きな紙が」
« Тие не били два листа,	「それは二枚の紙ではありません
«Туку си били две книги,	それは二冊の本なのです、
«Што ги пеят попови,	その本で坊さんがお勤めをするための、
«Да заверуват Рисяни	キリスト教徒が信仰を保ち
«И да си държат празници—	祝日を守るための、
«Света Петка и Света Неделя»	聖ペートカと聖ネデーリャの日を祝うための」

[Bessonov 1864: 158-159]

このように南スラヴの正教圏では聖ネデーリャは日曜日を人格化した聖女として崇拝されているが、そこでは彼女はギリシアの聖女である殉教者聖キリアキのスラヴ語訳として解釈される。キリアキ Κυριακήは「日曜日=主の日」を意味するギリシア語であり、これがスラヴ語で「ネデーリャ」と訳されたのである。この人格化された日曜日である聖ネデーリャはイコンにも描かれている。この崇拝はさらにカトリック圏のスロヴェニアにも見出される。そこでは聖ネデーリャはラテン語で Santa Domenica と呼ばれ、壁画に描かれ次のように歌にも歌われた。

Sv.Nedelja je zgodaj vstala, hodila po hiši, umila roke in šla na široko polje.

Na polju je stal križ, na njem Jezusova srajca.

Potegnila jo je dol in pokleknila nanjo.

Mimo je šlo 100000 romarjev in Marija.

Marija je rekla sv. Nedelji, da gredo romarji na goro

Kalvarijo, kjer bo njen sin imel zlato mašo.

Kdor bo to mašo videl, bo rešil iz vic očetovo, materino in svojo dušo.

[Kretzenbacher 1989: 368]⁽⁴⁾

聖ネデーリャは朝早く起きて家の中を歩きまわり、手を洗って広い野原に出た
野原には一本の十字架が立っていて、そこにイエスの衣が掛っていた

聖ネデーリャはそれを十字架から下ろしその前に跪いた

すると彼女のそばを十万人の巡礼とマリヤが通り過ぎていった

マリヤは聖ネデーリャに言った―「巡礼たちは

ゴルゴタの丘に向かうのです、そこで私の息子のために黄金のミサがあり、

そのミサを見た者は煉獄から

父と母と自分の魂を救うことができます」

日曜日の名称は、東スラヴ語が分化した16世紀末に、ロシアでは女性名詞 *nedělja* から「復活」を意味する中性名詞の *voskresen'e* になってしまった。このため、南スラヴで聖ネデーリャとして知られる殉教者聖キリアキは聖キリアキヤ *Кириакия* の名でロシアにも知られ、教会暦で祝われるが、その名はピャートニツァ「金曜日」のように「日曜日」を意味する女性名詞に訳されることもなく、日曜日との連想はない。おそらくそのために *voskresen'e* に対応し、「復活」を意味するギリシア語 *ἀνάστασις* に由来する実在の聖女、聖アナスタースイヤ *Анастасья* が人格化された日曜日の機能を果たすようになった、と考えられる。

既に16世紀の『百箇条』(41章、21問)では「聖ピャートニツァと聖アナスタースイヤが現われた」と語る偽預言者が告発されており [Stoglav 1863: 138; 中村 1993: 62]、これは人格化された金曜日と日曜日の信仰を暗示しているが、同時にこの頃既に日曜日の呼称がネデーリャからヴォスクレセーニエに転換していたことをも示している。

ノヴゴロドのイコンなどではしばしば同一の画面に聖アナスタースイヤが聖パラスケーヴァと並んで描かれている。これは金曜日と日曜日イエス・キリストの死と復活を象徴する曜日として対照的に捉えられているだけでなく、教会暦における聖パラスケーヴァと聖アナスタースイヤの祝日が旧暦10月28・29日と隣り合っている、と言う事実にも起因していると思われる。そして

教会暦での両聖女の祝日の順序性は、金曜日の後に日曜日を置いて考える民衆的な週概念に重なり合うものであることを指摘しておこう。ちなみに南スラヴにおいて聖ネデーリャとして信仰される聖キリアキの祝日は旧暦7月7日で、聖アナスタースイヤの祝日とは全く異なる。

以上見てきたように、スラヴ諸民族においてはすべての女性曜日が人格化されている。聖スレダー、聖ピャートニツァ、聖ネデーリャ、聖スッボータがそれだが、男性曜日である月曜日と木曜日に現われるスロヴァキアの妖怪も多くが女性の妖怪である。この時間の人格化と女性性の結びつきについては別に考察が必要であろう。

5. 結論

このように見ていくと、月曜から始まるスラヴ諸民族の伝統的な週概念においては、週を構成する曜日は、偶数一奇数曜日の対立だけでなくその他の様々な基準によって分類され、様々な意味付けをされていることがわかる。そこにはおそらくキリスト教導入以前の異教的な時間概念と、キリスト教導入後になされた曜日（特に斎戒日、週末の金・土・日曜日など）の意味づけが複雑に重なり合っていると思われる。前者は女性曜日の人格化、さらには女性的時間一般の人格化というスラヴ民衆文化に特徴的な現象とおそらく結びついている〔伊東 1997〕。スラヴ諸民族における週の構造と曜日の評価の起源を明らかにするためには、この問題を日、月、季節、年といった様々なサイクルを成して階層的に重なってゆく民衆的な時間概念全体との関わりの中で考えることが更に必要になってくるように思われるのである。

注

- (1) スラヴ語がキリスト教導入以前に「週」を表す固有の語彙を持っていたかどうかは明らかではない。現在のスラヴ語は教会スラヴ語に由来し「七日間」を意味する *sedmica* 系統の語彙（おそらくギリシア語 *ἑβδομάς* の借用語）、元来「日曜日」を意味した *nedelja* を転用したもの、「同じ日」を意味する *tyden'* 系統の三つに分かれるが、いずれも「週」を固有の語彙で表現したものではない〔Flier 1984: 111〕。
- (2) ラテン語の曜日名もギリシア語と同様に日曜日を第1の日 *feria prima* とし、順次 *feria secunda*、*feria tertia* …と数詞によって呼ばれている。
- (3) 聖ピャートニツァにかかわる民間信仰については〔伊東 1992〕、〔栗原 1996: 168-192〕、〔ハップズ 2000: 154-162〕、〔谷米 2006〕などを参照。
- (4) これと殆ど同じ民謡のテキストが〔Štrekelj 1895: 477 (No.460)〕に見出される。

引用文献

- Afanas'ev (Афанасьев), A.
 1859 *Народные русские легенды*. Москва.
 1995a, b, c *Поэтические воззрения славян на природу* т.1-3. Москва.
- Aničkov (Аничков), E.
 1914 *Язычество и древняя Русь*. С.-Петербург.
- Barah (Барар), L.

